

四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol.104

安田川の現状

高知県 馬路村長
かみじ 上治 たかし 堂司



「昔のアユはもっと大きかったぞ！」と自慢げに語っていた父親達の時代とは異なり、この夏は「どうでえ?」「いかん。おらん!」というのがアユ漁師達の挨拶でした。アユ漁師達に、安田川の変化について聞くと「アユやウナギがおらんかった」「深い淵がなくなった」「エビやツガニを見なくなった」等、昔の安田川とは違った一面を口にします。

安田川では、毎年相当量のアユを放流してきましたが、アユの漁獲高は年々減少傾向にあります。そこで安田川漁協では、ずいぶん前から冷水病になりやすい湖産の稚魚の放流をやめ、人工ふ化や海産のアユに切り替えるなど、対策を試行錯誤してきました。しかし放せどもアユは増えず、年々増える放流量に反比例して、漁獲高は減少しているように感じます。これは、家庭における合成洗剤の利用をはじめとする生活排水や、森林伐採・農業の使用による河川の汚染等様々な要因によるものと考えられます。

安田川の本物の姿を知り、私達に何ができるかを探るため、馬路村では平成19年7月27日に、専門の調査会社に依頼し、安田川の生態調査を行いました。その結果、「県内の同様河川と比べて魚類の生息量が少ない」との結論でした。その原因としては、山林などの崩壊による土砂の流入により、淵が埋まり魚の休み場が極端に少ないということでした。

その様な現状を改善すべく平成19年8月24日には、安田川の水量や水質および水産資源（アユやアメゴなど）の保護ならびに、河川の浄化と河川環境の保全を推進していくことを目的とし、「安田川水系資源保護推進協議会」が開催されました。この協議会は、安田町と馬路村の行政や関係者で組織しており、ここでは、女性の有志による環境に配慮した洗剤重曹の試験使用結果の報告や、最近注目されつつある「近自然工法」の活用等について話し合われました。「近自然工法」とは、従来の護岸工事と異なり、生態への配慮がされた動植物の生息・生育空間を保全しつつ、安全を確保するための柳などの植物を植えた土手や石積みによる水制などを活用する工法です。

楽しいけれど、少しでも油断すれば危険な目に遭遇する川。いくら慣れていても、川は私達の予想を超えるものです。釣り人が集い、川辺で子供達が楽しく遊ぶ姿が戻ることにより、より馬路村らしい姿になると思われれます。感覚や感性を育ててくれるこの環境を守るため、私達にできることをみんなで真剣に取り組んでみたいと思います。河川の延長が短く、流域に住む住民も限られているこの川は、取り組みをしっかりと推進すれば必ず、水産資源や自然が豊かな川として、次世代に送ることができるはずだと決意を新たにしています。



安田川のアユ



安田川の潜水調査状況



清流安田川